

二つの白法あり、よく衆生を救く。一つには慙、二つには愧なり。「慙」は自ら罪を作らず、「愧」は他を教えて作さしめず。「慙」は内に自ら羞恥す、「愧」は発露して人に向かう。「慙」は人に羞ず、「愧」は天に羞ず。これを「慙愧」と名づく。「無慙愧」は名づけて「人」とせず、名づけて「畜生」とす。慙愧あるがゆえに、すなわちよく父母・師長を恭敬す。慙愧あるがゆえに、父母・兄弟・姉妹あることを説く。
(真宗聖典二五七～二五八頁)

人間には

「生まれてからの願い」の底に

「生まれてからの願い」がある

帯広別院 輪番

巖城 孝明

text by Takaaki Iwaki

生まれながらの願い

帯広東幼稚園の園児に「ご命日の集い」で今年の春から別院の本堂で、毎月一回「今、いのちがあなたを生きている」というテーマでお話をしている。9月のことである。「世界で一番大切なものはなんですか」という問いかけに対して150人の幼稚園児が一斉に「いのち」と大きな声で答える。次に「だれのいのちが大切ですか」と尋ねた。すると躊躇することなく返ってきた言葉は「みんなのいのち」だった。

生まれてからの願い

「たとい我、仏を得んに、国に地獄・餓鬼・畜生あらば、正覚を取らじ」(真宗聖典 一五頁) すべての人が平等に救われていく道を阿弥陀仏の本願として説いた『仏説無量寿経』に出ている一番最初の願文である。私たちのこころの奥底にある不変的な願いを表現している。私たちは自らの欲望を満たし続けていく線上に幸福という文字を掲げ奔走して生きている。地獄とは「共に生きたい」と願いながら互いに傷つけ合うような生き方しかできないもの。また、「餓鬼」とは、いつも欲求不満の状態で生きているもの。そして、「畜生」とは、いつまでも一人立ちできず、力あるものに依存するような生き方をしているもの。これらに共通していることは自己中心的意識の存在である。この願文は、こころの奥深くにある「人と人とが傷つけ合うことなく、共に生きることのできる世界でありたい」という「生まれながらの願い」を表現した言葉である。

絶縁社会

現代社会を生きている私たちは、物質的な豊かさの中で「共に生きたい」という願いと裏腹に大きな不安を抱えながら生活している。自殺者が年間 3 万人前後という事態が続いている。さらに、自殺を凶った人の 80%が、悩み、苦しみを事前に誰にも相談できなかったという。そして、社会から孤立し、死後、長期間放置される孤独死は、人の尊厳を傷つける悲惨な死だと問題視している。しかし、孤独死の何が問題だというのだろうか。日本ホスピス緩和ケア研究振興財団の 2011 年調査によれば、「ある日、心臓病などで突然死ぬ」ことが理想だと回答した人は 70.9%もいたという。私が今まで出会ってきた多くの高齢のご門徒さんの中にも「ぴんぴんころり」の願望は根強い。中には、そのときのために「終活」(葬活)と称して生前のうちに自身のための葬儀や墓などの準備する方もおられる。その理由は「長患いをして家族に迷惑をかけたくない」「苦しみたくない」という。であるならば、住み慣れた自宅で突然死するのは、私たちが理想とする姿に近いのではないのか。しかし、これが私たちの本当の願いなのだろうか。

人間となっていく原点

司馬遼太郎氏は『21世紀に生きる君たちへ』という書物の中で、子供たちにこんなメッセージを贈っている。「自然物としての人間は、決して孤立して生きられるようにはつくられていない。このため、助け合う、ということが、人間にとって、大きな道徳になっている。助け合うという気持ちや行動のものは、いたわりという感情である。他人の痛みを感じることも言ってもいい。やさしさと言いかえてもいい。」

慙愧の心が人間関係を開く

冒頭の法語、「慙」は自分の取った行動や言動について痛みを感じ、「愧」は他人に対して羞恥する心。「慙愧」においてはじめて人を人として敬うことが成り立つ。「慙愧」の心がなければ、人間関係を生きていながらも相手を人として見ることができない。「慙愧」によって人と人との間を生きる「人間」が完成する。

親鸞聖人は和讃に「蛇蝎奸詐のころにて 自力修善はかなうまじ 如来の回向をたのまでは 無慚無愧にてはてぞせん」(愚禿悲歎述懐和讃)と謳われ、無慚無愧のこの身を翻させ、立ち上がらせてくださるものが、弥陀回向の御名であると言う。このことによって煩惱腹いっぱい抱えている私たちに「みんなのいのちが大切」、「共に生きる」というとが成り立つ。

「自分のいのちが一番大切」という答えを用意していた私に、ためらいもなく応えてくれた”みんなのいのち”という予想外の答えに大きな驚きと深い感動を覚え、あらためて気付かせてもらった。